Ishi Datami

いしだたみ

長崎南高関西同窓会　会報

～2007年　春号～

速報！

２００７年の関西同窓会総会

１１月１０日に開催へ！

長崎南高関西同窓会は、今年の総会を上記の日程で開催することを、幹事会で内定しました。詳しくは次号でお知らせしますが、みなさん予定を空けてお待ちください。

南高同窓会本部から

平成１９年の春

浦川英孝（副会長・６回生）

４月８日（日）午後１時から長崎南高校の第４７回生入学式が開催されました。開校以来となる日曜日の入学式は快晴の天候で、また日曜日ということで父兄もご夫婦揃って、或いは小さい兄弟を同伴したりと、例年より大勢での入学式となりました。

４７回生は４０人７クラスの計２８０人です。私たちの世代（６回生・７０７人）と比べると半数以下と我が国の少子化を象徴する変化ですが、彼らは単独選抜４年目の生徒で、最初から長崎南高校を希望して入学してきただけに、その表情は南高校生活への期待で明るく、早くも「気魄と情熱」を感じさせてくれ、式の最後の校歌斉唱も殆どの新入生が堂々と歌ってくれました。

毎年の事ですが、同窓会の仕事をさせていただいていると３月、４月になると同窓会の入会式、卒業式、入学式などの機会に出席し、改めて長崎南高校の卒業生である事を自覚し、かつての自分の姿を思い出させられます。同窓会の仕事に携わっている事の何よりの役得かもしれません。

４７回生が卒業すると南高校も創立５０周年を迎えることになります。そろそろ５０周年の準備を始めなければなりませんが、誰よりも５０周年の席にいていただきたかった同窓会の初代会長として２５年間同窓会を支えてくださった吉田茂生さんが６１歳の生涯を閉じられました。

私が同窓会の仕事に携わるようになったのは、昭和５８年に吉田会長から指名を受けてからです。以来、公私にわたって多くの事を教えていただきました。包容力のある優しいお人柄は誰からも慕われました。くしくも入学式の前日が葬儀で、長崎南高校の校歌で出棺をお見送りしましたが、私の生涯で一番悲しく聞いた母校の校歌でした。

新しい年の始まりに、いろんな想いが巡った春となりました。

一期一会

長崎南高関西同窓会
会長　大石　哲史（７回生）

ついこの前、お正月を迎えたというのに、あっと言う間に新緑薫る４月になりました。年度変わりというのは、我々会社勤めの者に暦年で年を越す１月とは別の趣を感じさせてくれるもの。どこからともなく「フレッシュ」を身体中に吸い込み、正月に取ったはずの歳を取り返すような気分にさせてくれます。

４月といえば、やはり新社会人。今年の関西企業の新卒採用意欲は極めて旺盛。前年度比の採用数は全国平均を大幅に上回り、製造業に加え非製造業がけん引、全体を底上げしているとのことです。今、関西経済が飛躍を続けている訳です。

大手メーカーは関西域内での設備投資を拡大。民間主導の景気拡大はいよいよ６年目に突入。バブル経済の崩壊後、苦しんできた長期低迷から脱出し、５年にわたって全国平均を上回る経済成長を続けています。今年８月に第二滑走路の運用開始を予定している関西空港など、インフラ整備も着実に進み、成長軌道に弾みをつけている様相です。さらに今後は、大阪・京都・神戸・奈良と有力な大学が集積する地の利も生かし、ロボット・バイオ・医療などの先端技術への取組みが加速することでしょう。構造改革の荒波を乗り越え、民主導で活力を取り戻した関西。こんな関西は今、本当に魅力的です。

さて翻って我が関西同窓会に目を向けると、この組織が少しでも活性化し、活力を取り戻すには、とりわけ若手層、極論すれば新入会員の入口対策に工夫が必要ではないでしょうか。上述のようにこんなオモロイ・魅力的な関西の大学に進学、あるいは企業に就職してくる南高の後輩達に同窓会組織の存在がどの程度認識（知）されているのか、いまさらながら不安に思う訳です。関西のみならず全体の問題意識として本部とも気持ちを共有し、今年はその解決に取り組む一歩にしたいものです。

一期一会とは、ご存知のように茶会の心得、そして仏教の用語。「一期」は人が生まれてから死ぬまでの間を意味し、「一会」は（法要など）ひとつの集まりや会合を意味しているそうです。出会いを大切にする。またその出会いにより人生が左右されることもあるくらいです。

在校生また在学生の方たちが（関西）同窓会という仕組みをつてに新たな一期一会を求められ、一方の私達もむしろこれからの一期一会を大事に楽しみたいものです。同窓会は母校を源として、恩師、学友と縦横に結ばれ心の交流ができる貴重な組織。発展を祈らずにはおれないものです。

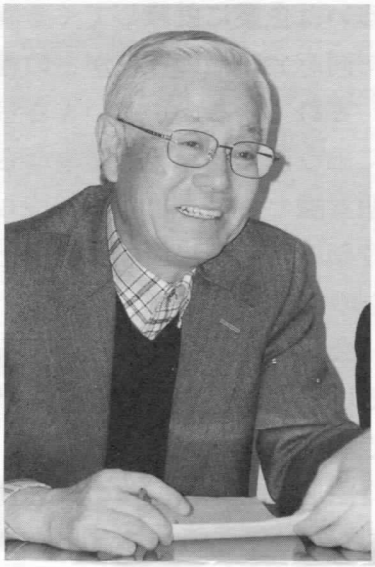
特集・座談会

団塊を語る

「２００７年問題」と呼ばれるように、「団塊の世代」が定年を迎えています。南高では３～５回生あたりがちょうど、その世代です。今回の会報では、一足先に定年を迎えた１回生から団塊の３回生までをお迎えし、人生のセカンドステージに臨む心構えをうかがいました。（司会は大石哲史会長）

《出席者》

１回生　八尋　重義さん　＝兵庫県芦屋市在住、大同生命保険ＯＢ
２回生　高石　　濶（ひろし）さん　＝大阪市在住、大広不動産
３回生　山下　昌子さん　＝大阪府吹田市在住



八尋さん

――（司会）まずは、目下のところの率直な心境をお願いします。

八尋　私の会社も６０歳が定年で、しばらくは好き勝手やっていたのですが、それまで３７年会社勤めをしていたものだから、何かしないと体がもたない。どうしようか考えていたところ、知人の紹介でＮＰＯ法人シニア自然大学（※注１）に入学しました。自然とふれあい、実習に研修会、観察会と結構忙しい。家にいるのが週に１日か２日という感じ。その代わり充実した生活を送ることができました。大学は１学年が約２６０人、１クラス６０人ぐらい。会社の役員や部長だった人、元小学校の校長先生、女性‥‥利害関係のない、いろんな人たちが同じ目的のもとに集まっています。長崎の人間は、地方とはいえ街中で育っていますから、田んぼも知らない。やること聞くこと初めてのことばかり。いい経験をさせていただいています。

――生半可な気持ちではだめだそうですね。

八尋　最初に言われたのは、カルチャースクールじゃないから、と。将来は地域のボランティア活動をやるんです。１年間学んだあとは、自然観察のリーダーになって鶴見緑地や服部緑地に来た人を案内してあげる。ひとつの目的をもって取り組めば、それを中心に生活が形成されるんです。

高石さん

――目的を持つということが大事なんですね。高石さんは、まだ現役でいらっしゃいますが。

高石　八尋さんの話を聞いて、うらやましいなあ、と思って。というのは、私はまさに定年後を暗中模索している最中。とりあえず体力をつけんといかんから、ジムに通っています。３年半ほど前に病気をしたので、リハビリを兼ねて。何をするにもしても体力が必要ですから。じゃあ、その次に何をするのか模索しています。私も自然は好きですが、郷土の歴史、できれば観光案内のボランティアですね。八尋さんの話を聞いていて、そういうことができないかな、と思いました。

――今は大阪にお住まいですが。

高石　長崎に帰りたい、帰らんといかん、というのはあるんですよね。母が寝たきりになってしまって。高校を出てからずっと親元を離れていたので、最後ぐらいは、という気もあります。

――切実な問題になりましたね。さて、山下さんはご夫婦ともに団塊の世代ですね。

山下　子どもたちが育って夫婦２人だけなので、旅行三昧、気ままに遊んでいます。いまはカメラにはまっていまして。３年前に一眼レフを買って、いろんな写真を撮りに行くんです。もともと主人の趣味だったんですが、デジカメになってから私も触りだした。以前は俳句もしていたのですが、私の感性には写真の方が合うようです。このまえ市展に初めて出品したら賞をいただきまして。主人が定年になったら一緒に写真を楽しんでもいいなあと思っています。それからネットもやっています。友達が全国、海外にもいる。「コミュニティ」など、共通の趣味や関心について語り合う集まりもある。主人は最初は「出会い系や！」って怒っていたけれど（笑）、いろいろ吸収するし、情報が入るし。そこで写真つきのブログを開いて、友人だけに公開しています。

――人と関わる、社会と関わるということも大事なんですね。しかし八尋さん、よもや自分がシニア自然大学で勉強して自然とふれあってなんて、１０年前には考えてませんよね。

八尋　３年前だって考えてない（笑）。

――あるいは高校時代、大学時代に、まさか自分が定年になるなんて想像もしなかったでしょうけれど。‥‥というところで、昔の思い出を振り返って下さい。

八尋　僕らは１回生。団塊の世代は僕らの２年下になります。これから子どもが増えるということで、学校をどっと新設した。われわれはテストケースなんですよね。団塊の

世代が入学する２年前に、とりあえず４クラス、１９０名ほど入学させた。

高石　２回生は１回生の倍。８クラスでした。

山下　３回生は１１クラスですね。弟が６回生ですが１３クラスでした。

八尋　南高ができたから、われわれは公立校に入れたのかも（笑）。

高石　八尋さんの時代は人数が僕らの半分だから、競争が少なくて楽やったろうな、と（笑）。そういう思いもありましたね。

――競争が激しいから、みなさんハングリー精神を養われ、パワフルな世代になったのでは。就職してからは「企業戦士」として高度成長を支えた世代ですね。

八尋　昭和４４年に入社して、４６年から会社の業績が良くなった。毎年毎年、それこそ「こんなにもらっていいの」と思うぐらい給料が増えた。楽しかったですよ。

――家族も忘れて仕事に没頭したわけですね。

八尋　転勤族だから紙切れ１枚で東京にも２回行き、単身赴任もしました。多い人は十何回も転勤している。たまたま私は職種に恵まれたので少ない方ですが、引っ越しのたびに子どもは学校を変わらないといけないし、家具は傷むし、そういう意味では家族を犠牲にしていますね。

高石　私の場合、転勤は全くないですね。というのは私自身、幼稚園を２回、小学校を３回、中学を２回変わって、高校に入って初めて入学した学校を卒業できた。だから、最初から転勤は嫌や、というのが頭にあった。子どものころに転校を繰り返すと、だんだん引っ込み思案になりますね。「またか。また、いちから（人間関係を）作らないかん」と。大阪に出てきたのは、親元にはいたくない、でも東京は遠いから。ちょうどそのころ長崎から大阪まで特急「さくら」で１０時間かそこらでした。

――山下さんは団塊の夫を持つ立場から何かモノ申したいことがあるのではないですか。

山下　毎晩１０時過ぎに帰ってきて、１２時からでも宴会して。食事が遅かったし、でも何時に帰ってきてもすぐ食事を出せるようにしていました。部下を呼ぶのが好きで、近くの寮生をみんな呼んでうちで宴会やったりとか。新婚早々から　来客が多い家でした。大変でしたが楽しい時間を過ごし、変化があって面白かったです。子育てや専業主婦、趣味のお稽古だけではストレスがたまってきたので　外に出て仕事をしました。社会勉強、人生勉強として、ずっと専業主婦ではなくて外に出たのは役に立

山下さん

ったなあと思います。あちらも自由にさせたけど、私も自由にさせてもらって、結構面白く過ごしてきましたね。だから老後も熟年離婚はないだろうと思っています（笑）。

八尋　僕自身が好きなことをやっているものだから、女房は孫の世話ばかり。それで紛れていいなあ、と思っています。ただ、旅行をしたいといえば、だいたい希望をかなえてあげていますから。旅行には結構行きますね。そういう時でないと夫婦２人のコミュニケーションがなかなかとれないから。

――夫婦、家族がともに健康であること。そして目的をもって、頭も体も動かす、というのが大切なんでしょうね。日本人はすぐ将来のためにお金をためる傾向がありますが、みなさん若いころに高度成長を支えたように、今度は高齢化社会の高齢世代として巨大消費市場を支えてほしいなあ、というのが現役世代の気持ちです。本日はどうもありがとうございました。

写真は左から、司会の大石会長、山下さん、八尋さん、高石さん

＝大阪市中央区の松本藤一法律事務所で

※ 注１）ＮＰＯ法人シニア自然大学は、シニア世代を対象に自然に関する講座を開講。昼と夜のコースがあり、１年間学んだあとは、さらに研究センターで学んだり、地域で活動したりできる。連絡先は、〒５５３－０００６　大阪市福島区吉野４丁目２９－２０、大阪ＮＰＯプラザ２０６（電話０６－６４６９－８０７７）。詳しくはホームページ（http://sizen-daigaku.com）でも。

特別寄稿

高知から

間渕豊（6回生）

関西同窓会の皆様お元気でしょうか？

昨年の4月から、県立中央病院と市民病院が統合して新たに設立された高知医療センター（平成17年3月開院）の医療行為を除く運営を行うPFI(Private Finance Initiative)事業会社である高知医療ピーエフアイ株式会社に出向しております。

高知市中心部の東南に位置し、車で20分ほどの距離です。桂浜までは車で10分ほど。宿舎も隣接地にあり、社会人になって33年目にして初めて通勤定期のない生活を送っています。徒歩7分の距離ですが高知の雨風は半端ではなく、これまでに3回、ズボンがびしょぬれとなったことがあります。傘はまったく役に立ちません。

さて、高知といえば鰹、酒ときますが、ほとんどの宴会料理に鰹のたたきはつきものですし、小さい猪口で返杯の応酬です。アサヒビールの高知支店長に確認した話ですが、ビール（発泡酒等も含み）の消費量も人口当たりでは全国トップクラスとか。

女性が良く飲むとの噂はみなさんもよく聞かれると思いますが、そのとおりです。有名な皿鉢（さわち）料理も、もともとは奥様方が料理の準備を全て済ませて一緒に飲むために、いろいろな料理を大皿に盛り付けたものだと説明を受けました。

魚は注目されていますが、もっと美味なのは地元でとれる野菜です。どんなスーパーにも必ず地元生産者の名前が入った数々の野菜の専用棚やワゴンがあります。旬のものは美味だということだと思います。

話は変わりますが、高知のテレビCMでよく見かけるものは飲食店、病院、葬祭業です。県の人口が80万人を割り、高齢化が進み、産業も少なく、観光、官公庁、病院が三大産業ではないかと感じます（個人的感想ですが）。デパートも西武が撤退し高知大丸だけ。来高の際には是非一見を。「阪急」「阪神」「そごう」「大丸」とのギャップに驚かれることでしょう。

関西出張も時々はありますが、3月13日のボンバルディアの胴体着陸はひとごとではありません。高知医療センターでも緊急体制を敷いて万一のけが人の受け入れ準備を行いましたが、テレビで完璧な胴体着陸を見て、集まった人（医師、看護師、事務職員等）は一斉に拍手をしました。その6日後の19日は大阪日帰り出張で往復ボンバルディアでした。やはり気持ちのいいものではありませんね。

とりとめのない話にお付き合いいただきましたが、宝塚の自宅を留守にしているために掃除帰宅をときどきしています。今年の関西同窓会も掃除帰宅に合わせて出席の予定です。みなさんのお元気なお顔を是非拝見させてください。